

---

# なのは×さくら 絶対に大丈夫だよの魔法

六甲水

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

なのは×さくら 絶対に大丈夫だよの魔法

### 【Nコード】

N7365R

### 【作者名】

六甲水

### 【あらすじ】

高町なのははミゼット提督の依頼で友枝町である少女と一書にクロウカードを集めることに……その出会いでなのは少女からある魔法を教えてもらったのだった。

## 第1話 少女との出会い（前書き）

今日から新しく始めたなのはとさくらのコラボです。どっぞ見てく  
ださい

## 第1話 少女との出会い

「ここが友枝町か。」

友枝町のある場所に栗色の髪に長い髪をサイドテールにした女性がいた。名前は高町なのは。なのはが何故この町にいるかというところ……遡ること二日前

ミッドチルダ地上本部。

なのははある一室にある人といったその人物は……ミゼット提督だった。なのははこの時自分が何か失敗して何を言われるのか心配だったのだが……

「高町なのはさん。そんなに緊張しないで、別にあなたが何か失敗してそれを咎めるとかじゃないから」

「は、はい。それで、今日は何か合ったんですか？」

なのはがそう尋ねるとミゼットは少し困った感じの顔をして言った。

「実わね。ある魔術師が作った魔法のカードがある場所に散らばっちゃったのよ」

「魔法のカード？あまり聞いたことが……」

「まあ、私もその魔術師とは何度か会ったことがあるんだけど、その人が作ったカードが散らばってしまつて災厄が訪れるっていう話なの。」

「災厄ですか。それは一体……」

「それはちょっと分からないの。それであなたに頼みたいことは……」

「その魔法のカードの搜索ですか？」

「いいえ、ある女の子がそれを集めてるのよ。」

ミゼットは一枚の写真を机に置くとなのはは写真を見た。

「この娘が……」

「ええ、それで貴方に頼みたいことは、彼女と一緒にクロウカードを集めて欲しいのよ。」

「分かりました。」

「もし人手が足りなかったら、はやてやフェイトも呼ぶから」

という理由でなのははクロウカード探しを命じられたのだったが…

……

「うーん、そのクロウカードを集めてるって娘をまず探さないと……」

となのはは桜が咲き誇る道に出た。桜の花びらを散る景色を見てなのはうつとりしていると……

「ほえええええ、遅れちゃうよ」

とローラーブレードで滑る少女が通り過ぎる。なのはその少女に見覚えがあった。

「あの娘………ねえ、そこの君待って。」

となのはが声をかけると少女が止まりこっちを振り向き、近づいてきた。

「あの、私に何かご用ですか？」

「うん、そつだよ。木之本さくらちゃん。」

「ほえ？何で私の名前を………」

さくらは動揺していたが、なのはが笑顔でこう言った。

「今は詳しいこと話せないから、でもあなたがクロウカードを集めてるってことは知ってるからね。」

「ほえ、どうして、クロウカードのことを……」

「夕方にあなたの家の隣の家に来て、私が滞在している間住む家だから。」

なのはそう言い残して、さくらと別れたのだった。

この出会いからなのははさくらから無敵の魔法を覚えてもらうこととなるのだった。

## 第2話 F1Y? (前書き)

第2話です。今回はF1Yのカード登場となのはとの再会です。



## 第2話 Fly?

なのはと出会ったさくらは、なのはのことを考えながら登校していると友枝小にたどり着いてしまった。

「あの人一体誰なんだろう？クロウカードの事知ってるみたいだったし……………」

「さくらちゃん。おはようございます」

さくらが考え事をしていると、後ろから声をかけられた。振り向くと長い黒髪にウェーブのかかった少女、大道寺知世がいた。さくらの大親友であり、クロウカードやさくらがカードキャプターだということを知っている。

「おはよう。知世ちゃん。」

「さくらちゃん？何か考え事でもしていたのですか？さつき雪兎さんに会いまして、さくらちゃんが元気ないからアメ渡しておいてっ  
て」

「ほえ、そうだったの？」

雪兎というのはさくらの兄の桃矢の親友であり、さくらが好意を寄せている人物だ。

「それで、何か悩みでも？」

「うーん、悩みというか、朝学校に行く時に綺麗なお姉さんに話し

かけられたの」

「あら、落とし物でも拾ってくれたんですか？」

「ううん、それが、私の名前知ってて、それにクrouカードの事も知ってるみたいだったの」

「あら、それじゃあ、どこかでさくらちゃんがクrouカードを集めている姿を見られたりとかしたのですか？」

「でも、あの人から何だか違う感じがして……………」

「その人に私も会ってみたいですわ。」

「うん、知世ちゃんも来てくれると嬉しいかも」

体育の時間さくらのクラスは運動場で跳び箱をやっていた。さくらは基本的に運動神経が良いので、さくらにとって体育の時間は楽しみの一つでもある。

「さくらちゃん。相変わらず運動神経いいですわね。」

「ありがとう。知世ちゃん。」

「そういえば、今朝の話なんですけど、」

「ん、何？」

「昨日の夜、私の母の知り合いが挨拶に来ていましたわ。しばらく友枝町に住むって」

「それと朝の話とどうい関係が……」

「さくらちゃん。さくらちゃんが会った女の人ってどういう感じでした？」

「うーんと、栗色の髪に、こつサイドテールにっていて、何だか優しそうなお姉さんだったよ。」

「実は、その人。私の家にも来ましたの。」

「ほえ、そうなの？」

二人がそんな話をしていると、突然突風が吹いた。

(なに？鳥？)

突風が吹く中、巨大な鳥がいたのをさくらは目撃したのだった。

夕方、さくらと知世は昼間の事を話していた。

「鳥ですか？私は見ませんでしたけど、」

「うん、他の子もそう言った。あれって、やっぱりクロウカード。」

すると、さくら達の前になのが立っていた。

「こんにちは。さくらちゃん。」

「あなたは……朝の……」

「あなたの友人ももう着ているわ。」

第3話 F1Y? (前書き)

今回はなのはとの合流です。

### 第3話 Fly?

さくらと知世はなのはに連れられ、なのはの家を訪れるとそこには

.....

「おお、さくらに知世。何やお前らも来てたのか」

と黒髪の女性と一緒にたこ焼きをたべている。黄色い生き物ケルベロス事、ケロちゃんがいた。さくらはコケそうとなり、知世は苦笑いをしていた。

「け、ケロちゃん。どうしてここにいるの？」

「ん？ちよつと魔力を感じてなあ。自然に隣の家に行ったら、この黒髪のねーちゃんと栗色のねーちゃんがいてな、たこ焼き作ってもろうつたんや。」

「あはは、何を食べさせようか分からなかったけど、普通の食べ物でも良かったんだね。」

黒髪の女性。すずかは笑顔でそう言つと、さくらと知世を椅子に座らせ、紅茶を出した。

「紅茶でよかった？」

「あ、はい。」

しばらくなのはたちと一緒に紅茶を飲むと、さくらがなのはに質問をした。

「あの、どうして、私がクrouカードを集めてるって分かったんですか？」

なのはしばらく考え、答えた。

「えっと、写真の女の子とそっくりだったし、それにさくらちゃんから魔力を感じたからかな？」

「えっ、」

なのはとさくらはその後、自分のことと、魔法と出会ったことを話した。すると、知世がある事を思い出した。

「そつえば、お昼のあの突風も、クrouカードだったんじゃない……」

…

「なんや、クrouカードにおうたんか？なら、早速会いに行くぞ。」

二人がそう言うと、なのはとさくも立ち上がり、準備をした。

「ほら、さくらちゃんも行くっ？」

「ほえ、は、はい。」

「というわけで、今回のさくらちゃんの服はコレですわ。」

こうして、四人と一匹でクrouカードのところへ向かうのだった。





**第3話 F1Y? (後書き)**

短めでスミマセン。

次回はF1Yの話はおわります

## 第4話 F1Y? (前書き)

ようやく続き上げられました。今回でF1Yの話は終わりです。

## 第4話 F1y?

なのはとさくら、そして、ケロちゃんと知世の四人は友枝小学校の校庭にいた。なのはは既にバリアジャケットに着替え、さくらはといつと知世が用意した衣装を着ていた。

「今回は鳥さんをイメージしたものですわ。」

「ありがとうね。知世ちゃん。でも、何で鳥さんをイメージしたの?」

「それは、ワイが説明してやるわ。多分さくらと知世が会ったのはF1yのカードや」

「F1y?」

「そや、鳥型のクロウカードって聞いたら大体想像がつく。それにしても……妙やな。F1yは基本おとなしい奴なのに……」

そう言っけケロちゃんは腕を組んで考え込む。一方さくらはなのはのバリアジャケットをじっと見つめていた。

(なのはさん。綺麗だな。白い服って何だか魔法少女って見えるし……)

「ん?どうしたの?さくらちゃん?」

「ほえ、あ、その、なのはさんが着ているその服って……」

「バリアジャケットのこと？これはね。簡単にいうと防護服みたいなものだよ。レイジングハートが私のイメージに合わせてくれるの」  
なのははそう言って、持っている杖、レイジングハートに声をかける。するとレイジングハートが答えた。

『はい、さくらさんもどうですか？』

「あ、私は知世ちゃんが作ってきてくれますから。」

「なのはさんも着てみますか？今度なのはさん用に作りますわ。」

「ふふ、ありがとうね。知世ちゃん。それはそうと来たみたいだよ」

なのはが空を見上げると、空には巨大な鳥がいた。

「あれがクロウカードなんだね。どうする？さくらちゃん」

「ほえ、わ、私ですか。」

「だって、クロウカードのスペシャリストだから。何も知らない私が指示を出してもね。」

「で、でも、」

「自信持って。」

「は、はい」

なのはの言葉を聞いて、さくらは一枚のカードを取り出した。カー

ドに描かれていたのは風の妖精を思わせるものだった。

「『クロウ』の創りしカードよ。我が『鍵』に力を貸せ。カードに宿りし魔力をこの『鍵』に移し、我に力を！『風』」

風の妖精が現れ、F1yを捕縛しようとするのだが、F1yは翼を大きく羽ばたかせ、風を吹き飛ばしさくらも吹き飛ばされた。

「さくらちゃん」

「さくら」

木の裏に隠れていた知世とケロちゃんが叫んだ。さくらは上空に投げ出され地面に落ちそうになったのだが、

「あれ？痛くない？」

「大丈夫？さくらちゃん」

気が付くとなのはがさくらを抱き抱えていた。

「は、はい。」

「どうやらF1yには風属性の攻撃は効果がないみたいだね。でも、本当におかしいよね。ケロちゃんが言っているようにおとなしい性格のカードが何でこんなに暴れてるんだろ？それか何か苦しんでるとか……………」

「苦しんでる？もしかして、」

なのはの言葉を聞いて、さくらは何かを思いついた。さくらはなのはに言った。

「なのはさん。F1Yを少しの間動きを止めること出来ますか？」

「うん、できるけど。」

「お願いします。」

なのははさくらの言うとおりに従い、F1Yの体にバインドを掛けた。その時、さくらはF1Yのあるものに気がついた。

「やっぱり、なのはさん。私をF1Yの所に」

「うん」

なのはとさくらはF1Yに近づくとさくらはF1Yを抱きしめた。

「もう大丈夫だよ。怖がらなくて」

ふっとさくらはF1Yの脚を見るとF1Yの脚から血が出ていた。

「怪我してたんだね。」

さくらの言葉を聞いてかF1Yはだんだんと小さくなりクローカードに戻った。

その後、さくらはクロウカードに自分のサインを入れるとF11Yが負っていた傷が癒えるのだった。そして、F11Yのカードの効果を聞いて空を飛べることが出来ていた。そんなさくらを見つめるなのはにケロちゃんが質問してきた。

「なあ、なのは」

「なあに？ケロちゃん」

「F11Yが怪我してること、気がついてたんやな。だからさくらにあんなヒントを……………」

「違うよ。私は怪我してることに気がついてない。でも、何かに苦しんでいることは気がついたよ。」

「ほんまか？」

「うん。」

こうして、なのはが立ち会った最初の事件は終わるのだったが……  
…次の日さくら達は驚きを隠せなかった。

それは朝のホームルームの時間、担任が一人の女性を紹介していた。

「今日からしばらくの間副担任として来て下さった先生だ」

そこには白いスーツに着替えたなのはの姿があった。

「はじめまして、今日からこのクラスの副担任となった高町なのはです」



第4話 F1Y? (後書き)

次回は『水』の事件です。

## 第5話 Water? (前書き)

久しぶりの更新ですみません。今回はWaterの話です。

## 第5話 Water?

ある日の昼休み、さくらは友達と一緒にお昼ごはんを食べていた。何故かこの日、ずっとさくらはうきうきしていたその理由は……

「今日はプールの日だから楽しみだな」

「あらあら、さくらちゃんは楽しそうですね」

そんなさくらを見てのほほんとしている知世。するとさくらの友達の一人がある話をした。

「そういえば、家のお姉ちゃんって六年生でしょ、おとこのプールの時間に引っ張られたんだって、足を……」

その話を聞いて、少し怯えるさくら、すると知世が……

「誰かの悪戯とかじゃないんですの？」

「ううん、三年生の子も足や手を引っ張られたって聞いたよ。」

昼休みも終わりに近づき、さくらと知世は一緒に教室に戻ろうとしていた。すると……

「さくらちゃん、知世ちゃん」

スーツ姿のなのはが呼び止めてきた。なのはFLYの事件以降友枝小学校で教師として働き出した。さくらと知世とは同じクローカードの関係者のため、親しい。

「あら、なのは先生」

「二人とも、今から教室に戻るんだ。って、さくらちゃん？どうしたの？何か怯えてる感じがするけど……」

「だ、だ、だいじょうぶです。」

「実はさっきプールに纏わる話を聞いて……」

「プール？」

知世はなのはに昼休み話していた幽霊騒ぎについて話した。するとなのはは少し考えだして……

「……幽霊ね。」

「なのは先生は苦手じゃないのですか？」

「知世ちゃんやさくらちゃんくらいの時は怖かったけど、魔導師になつてからそういふのは怖くはなくなつたよ。でも、ちょっと気になるな。今日学校終わつたらケロちゃんあたりと話してみようっか」

「私はお稽古があるので、参加はできませんが……さくらちゃん？」

「あ、はい、」

こうして、なのはが関わるクロウカード事件二つ目が始まるうとしていた。

## 第5話 Water? (後書き)

短めですみません。次回は近いうちに更新します

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7365r/>

---

なのは×さくら 絶対に大丈夫だよの魔法

2011年8月8日18時36分発行